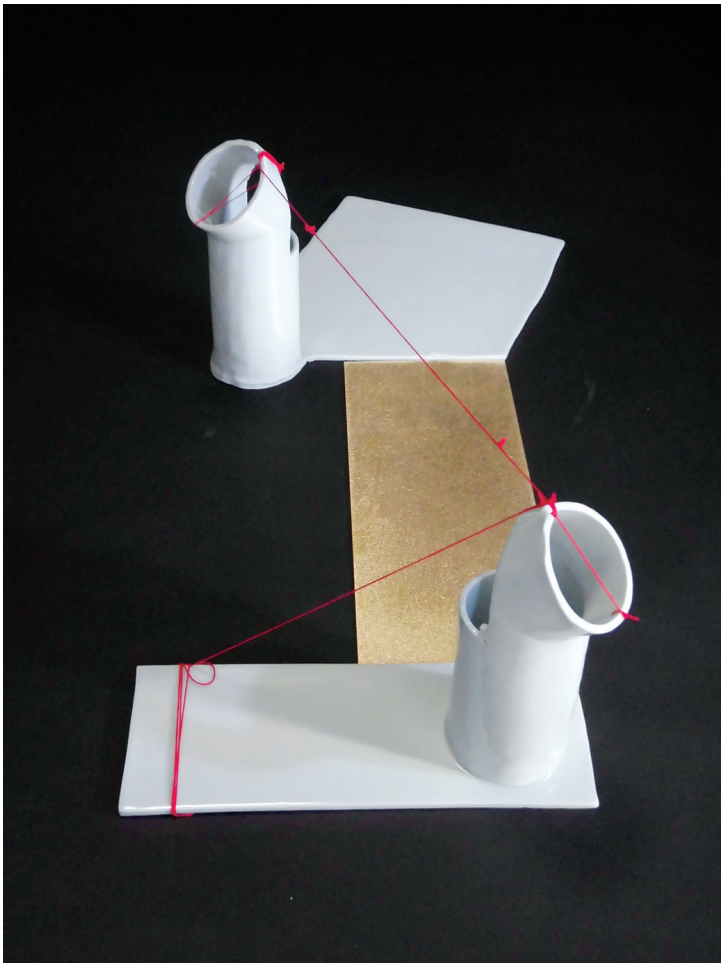
アートギャラリー

白　磁

＝円空＝

石　田　成　昭



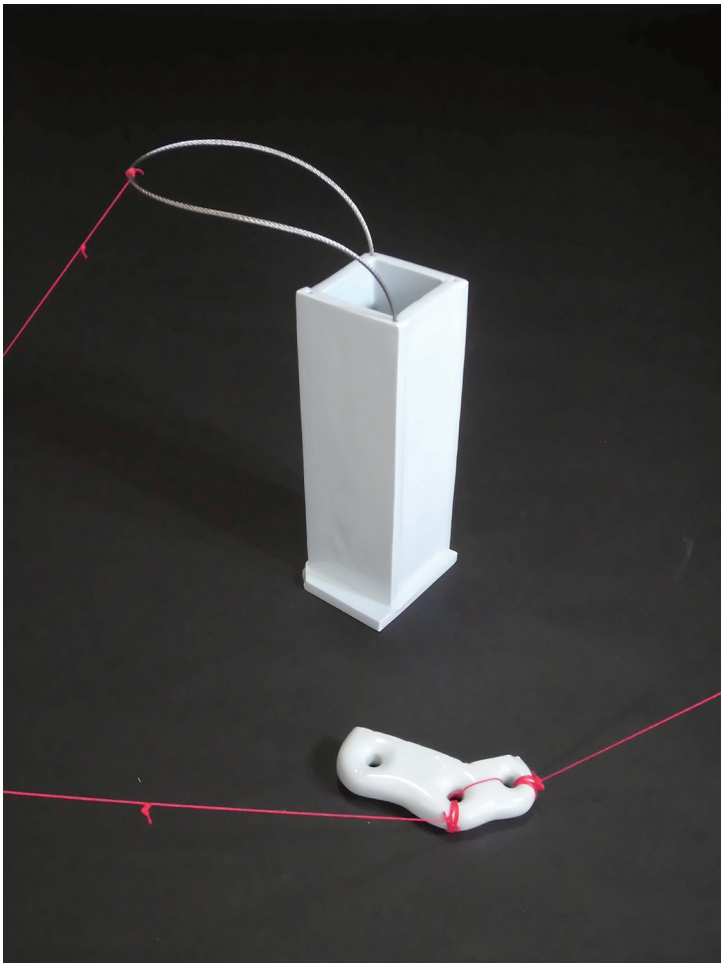
奈野５９９　高 22cm

―円空―

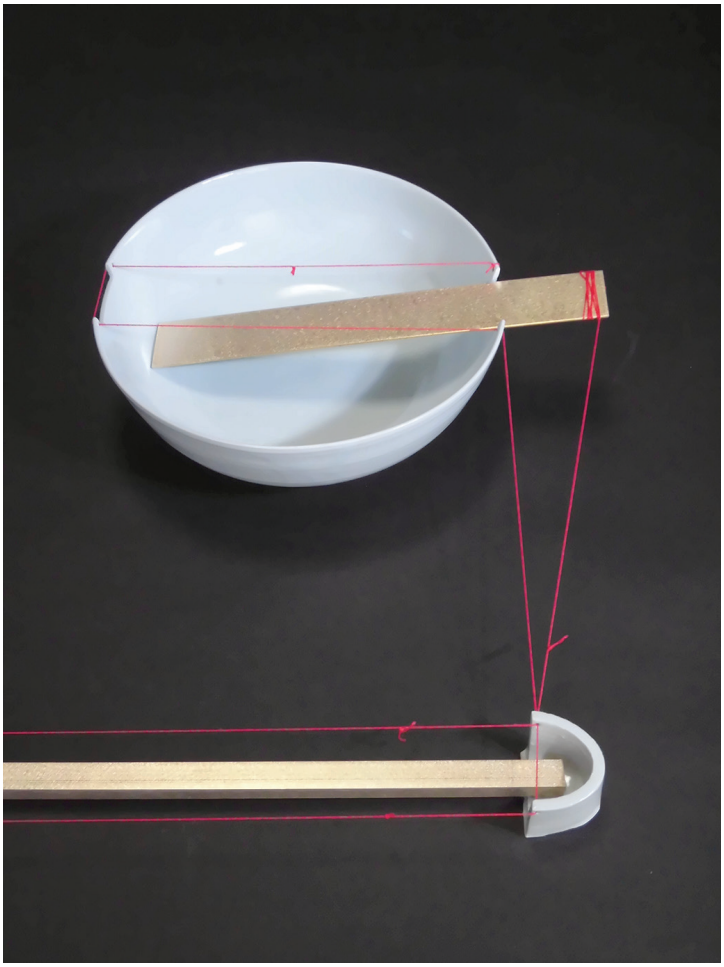
円空仏に初めて出会ったのは高校２年生の時の事、大阪梅田の百貨店の催事場だった。もう半世紀も昔の事になるが、会場に所狭しと並べられた仏像は奈良・京都で見るそれとはあまりにも違い、300 年も前にこの様な現代的な仏像を手掛けた人がいた事には驚くほかなかった。生々しい鉈とノミの跡が残る仏像は野性味溢れ力強く、しかし口元には微笑を湛え優しくこちらを向いていた。すっかり円空仏の虜になり、大学へ入って飛騨・高山の千光寺に詣でた。あいにく御住職様が不在で、御庫裏様が仰るには「倉庫の鍵のあり場が分からない」と拝観を断られた。「悪いですね、こちらが倉庫です」と案内され、破れた扉の隙間から中を覗くと薄暗い中に円空仏の横顔が５つ６つ仄かに見えた。その中の１つが前のめりに少し傾き、あたかも「お越しやす」と挨拶されているように思えた。正面からの拝顔は叶わなかったが満足して山を下りた。私の作陶 50 年を振り返ると、この場の場景が折ある毎に思い出され、仏像は勿論の事この成行きによって自分の中に何かが芽生え、創作の原点の１つを成した様に思える。時の流れに添い突如現れるご縁の不思議さを深く感じる。

円空は 64 年の生涯で 12 万体（年間約４千体）を彫ったと云われているが、この驚異的な数字は一体何なのだろう。北海道から畿内まで行脚しつつ朝から晩までひたすら彫りに彫ったのだろう。よほど頑丈な肉体と精神の持ち主と云わざるをえない。凄腕のこの超早技こそがこれらの無垢な仏を作る重要なポイントで、感性がコトバを上回る１つの有効な方策なのだろう。先の文芸学部論集に記したアール・ブリュットと円空仏が何か通じるものがあり、無為自然な佇まいに只々首を垂れ手を合わせるばかりだ。仏像を彫ると顔とか姿が彫る人とそっくりになると云う。つまり円空仏は円空そのものなのだ。今世間でスーパーボランティアの男性が話題になっているが、円空の姿と重なりあう。円空は正にスーパーボランティアの元祖だったのだ。ボランティアと造形芸術は見た目こそ違うが心根は同じなのだ。飢餓や災害に苦しむ罪の無い人々に大きな安らぎと勇気を与えた事は間違いない。凡人にはとても真似のできる生き方ではないが、円空には学ぶべき所が実に多い。円空は日本男児ナリ。

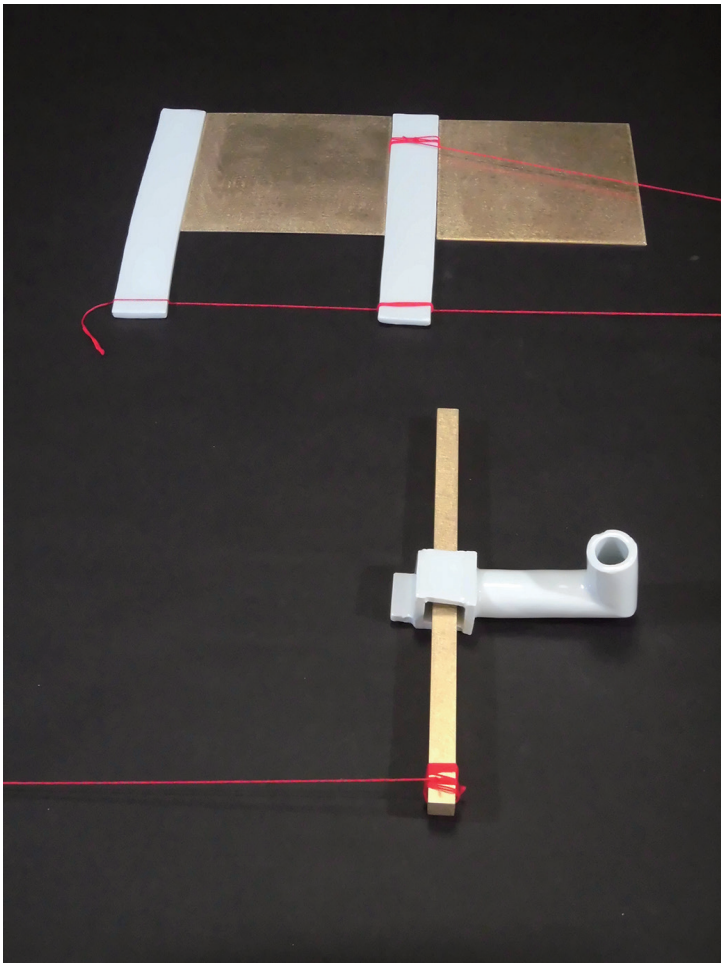
まる空の　向こうに見ゆる　無辜の民
救う弥陀の手　男ぞ円空



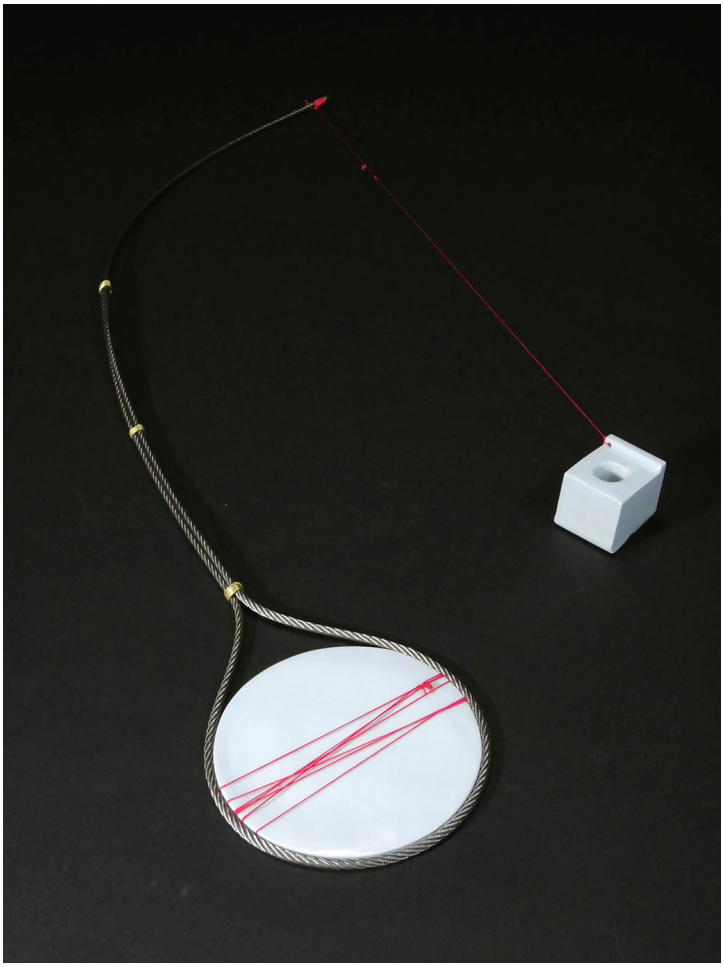
奈野５９４　高 50cm



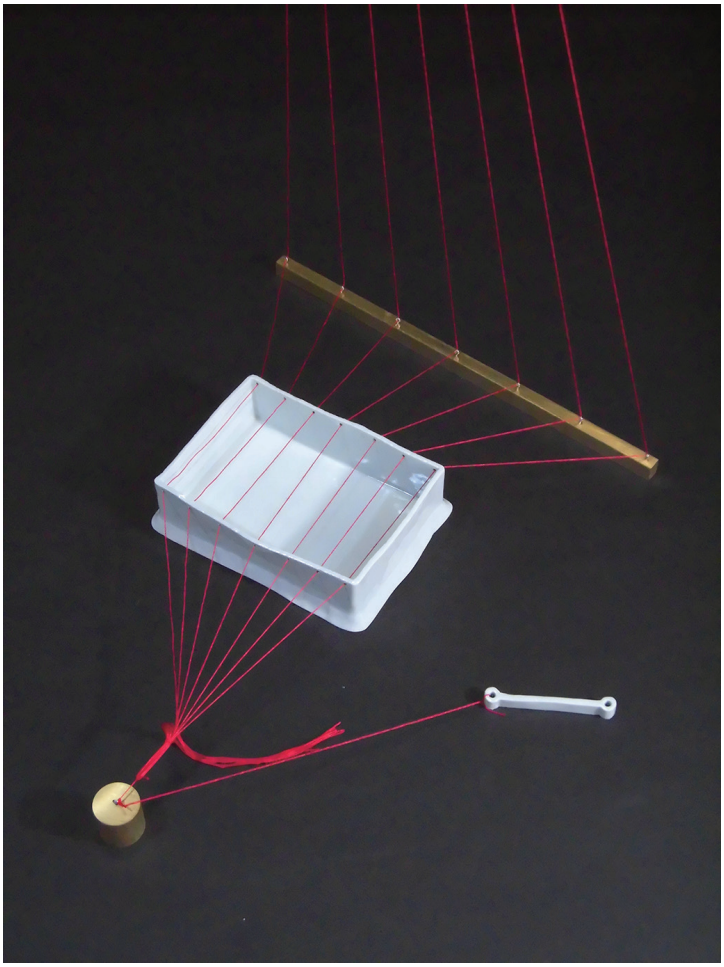
奈野５９０　高 12cm



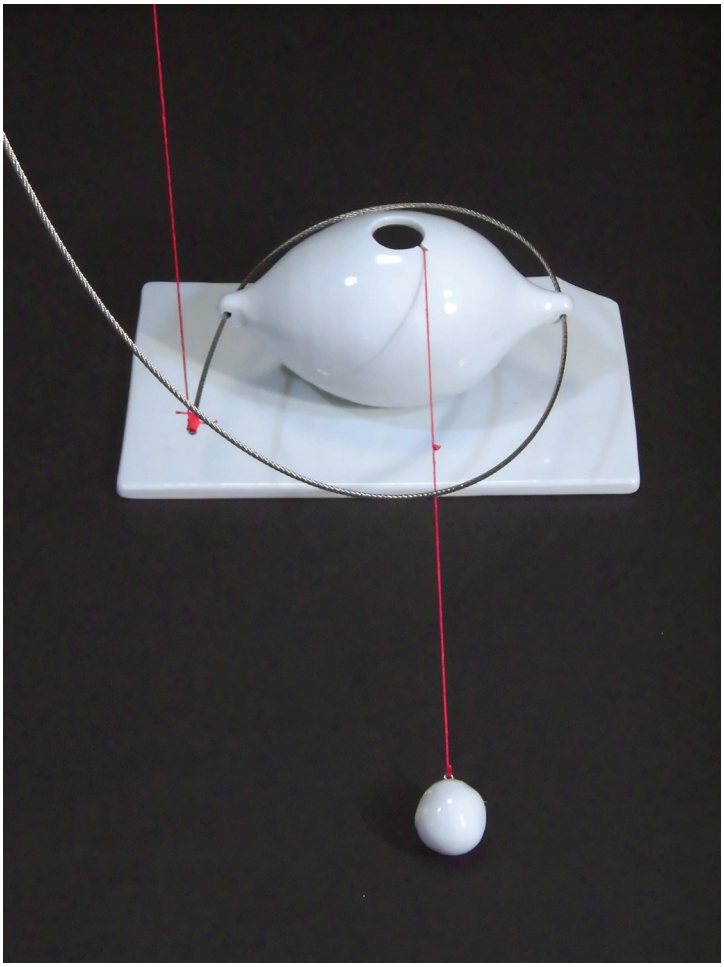
奈野６０３　　高 7cm



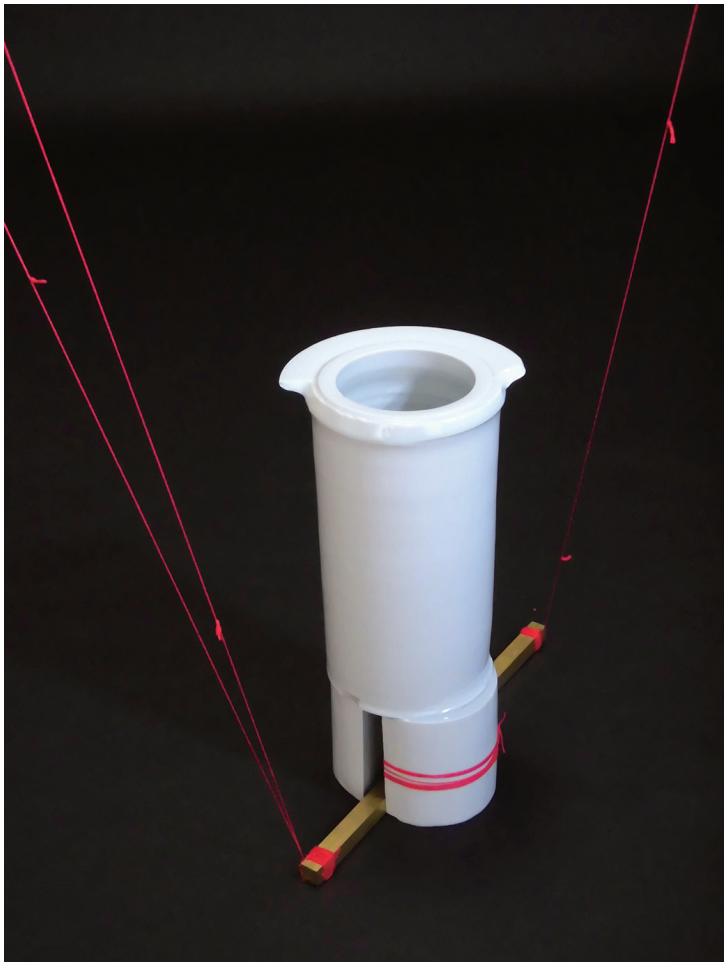
奈野５９３　　高 6cm



奈野５９７　　高 7cm



奈野６０４　高 10cm



奈野６０２　高 35cm